

驚の眼は、今や青ざめた顔に沈むだ目附に變じて居る。ドイツ帝國の崩壊といふ事は、遠方から事實として承知はして居たが、ライン地方の旅行で、其のしるしを一々具體的に眼前の事實として見ては、今更の感に打たれざるを得なす。 *Sic transit gloria mundi!*

* * * * *

ライン河邊に過ぎした一週日、其の前には、ヴェルダン戦場の荒涼悽蒼の野原に、ドイツ俘虜が骸骨を片付け、墓を掘つて居るのを見た。其後には、ベルジクに一週間を送つて、ドイツ軍の焼打した廢墟に、此もドイツ俘虜の勞働して居るのを見た。シャルロアの鐵工業地は、盛に黒煙を吐いて、工業回復に勉めて居るか、ドイツの工場には、煙の立つものは三分の一に足りない。七十年戦争に、フランスの受けた打撃は、云はゞ強い槍傷の如きものであるが、今度の戦場で、ドイツは外傷と内患とに悩む重病人となつて残つた。但

し、戦後の困難は、程度の違ひこそあれ、各國共に随分重大の瘡痕に悩むで居る。ベルジクや北フランス工業の完全な回復は、少くとも十五年を要する外に、直接には戦争で破壊された町村の再建や、物資の供給が、痛切の大問題であり、戦勝の喜悅も、經濟上の直接の苦痛に蔽はれる勢である。其の他物價高値（フランス語では *la vie chère*）や、物資缺乏やストライキや、又東方ヨーロッパの不安状態など、云はゞ大地震後の餘震に、人心恟々たると同じ有様である。

然しながら、ヨーロッパの再建改造は、第一は經濟問題から、次には政治問題に進み、終には精神生活の新紀元に進むに違ひない。其が如何なる方面に如何なる内容を呈して來るか、今はまだ斷定し得ないが、少くとも、其間に平民一般の勢力が強大になる事、従つて人間の價値といふ事が要點となる事は、大體之を豫見し得る。言葉を換へて云はば、人間の自由と、自由決定に

基く結合と、之を如何に案配するかといふにある。ドイツの軍國主義は、自ら崩壊して、其跡には、所謂「新精神」(Der neue Geist) 或は「精神的武装解除」(Demobilisierung der Geister) が大問題となりつつある。而して戦勝者たる聯合國の側にも、今までの資本階級は、最も甚しい動搖を受け、平民の勢力が之に對して突撃を行はうとしつつある。ベルジクは、恐らく此點に於て、急進的改造の國となると考へられるが、帝國的勢力を後援として、資本家の勢力を延ばさうとする者は、恐らく内部からの反抗に堪へないであらう。戦争以外に超然として、獨りよがりをして來た日本の如きは、此のまゝで過ごせば、世界の落伍者となると覺悟すべきである。

舊世界から新世界へ

(大正八年九月)

パリの都を去つたのは九月廿二日。日影爽かに、朝風涼しい中に、暫く住みなれたセイヌ河畔の居を辭する時、家僕は、此の次また何時逢へるか、愁を帯びて送つてくれた。こちらは故國へ歸る旅出の悦に充ちても、亦庭の木、家の前を流れる河、河向ふの丘、何れも半年の親みを重ねた天地に別れる哀れを覺えざるを得ない。

車はパリの町々を通り過ぎる。大路大路の並木は黄ばみ落ちて、秋の色稍老い、町々の人通も寂しげに少いが、コンコルドの廣場に迸る噴水は、勇ましげに日光に白く輝いて居る。春の初め、此地に着いた時、さては春から夏にかけて、世界國々の人々が種々の顔色や制服で、此の廣場の往來に充滿して居たのも、今は昔の夢となつて、四方の石像のみ、淋しげに立ち並ぶ。

思へば、今やこのパリの都を辭して去らうとする身である。古い歴史は云はずとも、此の年の初め半年の間、此の都は實に世界の中心、萬國の縮圖となつて、其の間に大戦の跡始末は議せられ、古來、哲人が夢想した國際的聯合も、形だけなりとも、此の都で成り立つたのである。今年の春から夏にかけて、世界諸方面の利害、要求、思想、希望、熱情、空想、さては、批評、攻撃、論難、冷笑など、あらゆる動搖は渦卷の如く此の都に押し寄せ、各々此等を代表する政治家、軍人、思想家、宗教家乃至運動者は、あらゆる人種、國民、階級を表現して、千差萬別の姿を此の都に見せた。軍服、制服のあらゆる色彩と共に、都大路を往來する車には、世界中の國旗が翻り、其中には革命を経たドイツの新國旗も見えた。其間に研究、商議、討論も行はるれば、動搖、運動、煽動も現はれ、感激と冷罵、狂熱と打算、得意と失望、喜悅と憤慨、妥協と強壓、要情と峻拒、あらゆる混亂錯雜、或は衝突、或は調和、

或は破裂、或は一致が、諸方面に活躍し、飛動し、入り亂れ、立ち替つて現はれた。四年間戰場に現はれた千差萬別の劃策、活動、戦闘等も、勿論想像も及ばない錯雜を呈したには違ひないが、此の半年の間に、此の都に起つた喜劇、悲劇あらゆる活劇の、深く且つ複雑なには及ばなかつたであらう。

然し其等の混亂複雑の生活も、今は殆ど過去の夢となつた。此等活劇の結果は、遠く世界に波動を及ぼし、種々の難問を各國民に與へるには違ひないが、而かも其の波動の中心、問題の源泉となつたパリの都は、今や元の靜かなパリとなり、秋の日影暖かなる中に、冷風はセイヌ河邊の並木を吹いて遊子の心を動かす。世界の文明、人生の活劇が、今や其の幕を改めんとして居るしるしは、秋風のパリに現れ、而して自分は大西洋を渡る爲に、パリの都を去りつつある身である。

過ぎにし半年、實に世界の中心となり、文明の轉機を劃する大運動の集ま

つたパリの半年を回想しつつ、自分は車を驅つてステーションに向ふ。之から自分の旅路は、舊世界から新世界に向ふが、此半年間のパリは、又實に十九世紀文明の總勘定を持ち寄つて、そこで廿世紀の世界をどうするかといふ運命を決すべき舞臺となつたのである。五十年前のパリとヴェルサイユとは、フランスとドイツの興敗を決したに過ぎないが、今年のパリとヴェルサイユとは、實に世界の運命、新舊文明の興敗を決すべき衝に當つた。市中には、尙ほ巨砲ベルタや飛行船から來た弾痕を示して居るが、ドイツ軍は終に、彼等の焦せりこがれたパリ入りを遂げずに、ラインの彼方に敗退した。之が管に戦争の決となつたのみならず、實に文明進運の運命を決して、ドイツの權力主義と、それが含蓄する一切の精神は癒やすべからざる瘡痕を受けた。そこで之に代るべき、相互扶助の社會、民族と個人と自決自主の文明、國際調和の新氣運、之等が果して一九一九年のパリで十分保障を得たか。問題は茲

に横はる。然し、パリの都が此の半年の間に、此の問題の中心となつた事實は、千古の歴史に磨滅すべからざる印象を残した。而して、自分は、その間フランスの最高學院に、日本宗教の精神人物を講演すると共に、此の如き重大の意味ある活劇のパリに生息して、其の光景を目に見、其の空氣を心に吸ひ得た。

親友ガルニエ一人に送られて、列車に乗り込む。汽車は動き出した、而してセイヌの河を渡つて、パリの面影が林野のあなたに隠れた時、一九一九年のパリは、自分の心に其の姿を印して、永遠に過去といふ幕に閉ぢられた。

* * *

九月廿七日、マルセイユを船出した翌朝、海上一面濛氣を帯びて、さすがに地中海の碧色も黒味を帯びる。右にはコルシカ山々に雲がかゝり、左にはエルバの島根に白波が寄せる。一方はナポレオンが誕生の地、他方は彼が

流された小島。怪傑一生の浮沈轉變は、百年の昔となつても、山と水とは昔の姿を改めない。

翌朝眼さめて船窓から外を見れば、船はナポリの港に進み入り、ヴェスツァオの噴烟は、ゆるやかに空になびいて、之も亦、時代の経過や人事の變轉を知らぬげに悠々の姿を示す。上陸して友人ロレンツォを訪ひ、新舊の友人相會して、食卓には、フィウメの問題から社會主義運動の談が賑ふ。

ナポリを辭して、北の方ロマに向つたのは、九月末日。秋とはいひながら、日中の暑さはフランスの夏よりも暑く、山頂に聳える城廓や僧院の壁に日がまばゆく照る。こみ合つた車室の内には呼吸も苦しい位であつたが、アルバノの丘の上から遙に聖ピエトロ大堂の塔が見え出しては、「ロマぞこゝに」*Ecce Roma* と心の勇みに、汽車旅行の半日の苦熱も忘れ去つた。

かくて汽車が舊知のステーションに着いたのは三時。テルメの廣場には、

泉水迸り、蘇鐵の綠美はしく、物質のイタリア語には、いつにかはらず、抑揚に面白い階調がある。

ホテルに入つて、寢室の窓から見れば、隣の宮殿の軒端にはユーカリブトの葉が茂りかかり、すき透つた瑠璃色の空に對して鮮かな輪廓を畫き出す。眼に見ただけのロマは、やはり昔ながらのロマで、四年の戦亂はどこにあつたか、外形には跡を止めない。

直に車を驅つて此國の元勳で又自由思想家たる舊知のルツァツテ氏を訪うたが、家に居ない。同じ車でワテカノの方に向ふ。並木の綠の間には紅紫の花も匂ひ、宮殿の茶褐色に對して噴泉の水白く、バリを去る時の秋景色に較べて、再び夏のロマを見る。小路の角々にかゝる聖母像や、處々の廣場に立つ銅柱又銅像、色どつた扉の家に隣る、寺院戸口の緋緞帳、古色と新彩と、共に、ロマ町々の趣には、二千年來の傳來を示して、眼に觸れる物も、吹く

風も、皆「歴史」である。

テペロの河を渡る、天使の塔も過ぎる。威風天に聳ゆる大塔を前に仰で車を下れば、堂前の廣場、碧空に冲する噴水のしぶきが身邊に飛ぶ。嗚呼、身は再びサン・ビエトロの大伽藍の前に立つたのだ。

* * * * *

曾ては此處で、キリスト教徒の大虐殺が行はれた故址、而かも、殉死者の血を注ぐ處には信仰の花新に咲き、二百餘年に亘る度重なる迫害殺戮に打ち勝つて、此の信仰が大帝國の國教となり、信仰の花は教會の果を結び、此處に勝利のしるしかるビエトロの殿堂が起つた。かくて此の殿堂は西洋全體を支配する大教會の中心となり、諸國から集まつて來る信心の順禮も、懺悔滅罪の行者も、此の一堂を目當としてロマに集まり、シャレマンが此處の拜壇で帝冠を戴いて以來、幾多の帝王は此處に其の尊位の保證を獲た。而して此の寺に

隣るワテカメの丘には、法王の宮殿が年と共に大と美とを加へるに及び、大堂の改築には、天下の雄を極める計畫が成り、時の名匠ブラマンテは、畢生の心血を注いで設計を定めた。そこでその定礎式を行つたのは、一五〇六年の陽春四月十八日。朱衣金冠の高僧、紫袍青衫の王侯貴族が參列して此式を擧げ、法王ジュリオ二世が、大殿堂の將來を祝福した時は、恐らくロマ教會隆盛の頂點であつた。

されば此の盛儀に參し、教會の威嚴を通して神の光榮を仰いだ者の中、何人か、夫から僅か十一年の後、北の方ドイツの片田舎から、宗教改革の烽火が擧がり、夫がロマ教會の世界的權威を威嚇するに至らうといふ事を考へ得たか。此の定礎式に續いて、石を運び、壁を築く工事が盛に進行しつつあつた頃には、此改革の烽火を揚げるべき運命に生れた一學僧ルイテルが、尙ほ教會の忠僕と自らも信じ、黒衣の順禮姿でロマに來て、其土工を目撃したの

である。然るに、此の大殿の工を急ぐ爲に、諸方に喜捨を募集する爲に起つた滅罪符の問題からして、此の一學僧は蹶起して反抗の聲を揚げ、而して時勢の趣く所、天下之に響應し、ロマ教會の統一權は茲に破れ了つた。それから百餘年の間西ヨーロッパの天地は宗教戦争の舞臺となり、其の結末として教會中心文明と共に封建制度の最後を告げ、西洋文明は新近世史の幕を開いた。但し、此の分裂混亂の間にも、大堂の建築は益々歩を進め、ミカエル・アンジェロが設計になる大圓塔は、年と共に天に沖する其の壯嚴雄大の姿を完成して、一方には文藝復興の天才は、各々其の才と技能とを盡して、ワテカノの宮殿を裝飾し、天下の富を傾けて、天才の美を作り上げた。然し此等の殿堂が完成して、今に見る如き姿を呈した時、世界は既にロマ教會の世界でなく、新大陸の植民に、新科學の勃興に、又新思想の流行に、總て中世文明と別種の文明を作り上げつつある時であつた。

此の大殿堂の建築一つにも千數百年の歴史が縮面となつて現はれ、而して此の雄偉の姿、燦爛の美は、實に中世舊文明の頂點と共に、其の終焉を物語る。榮枯盛衰とは、云ひ古るした言の如くであるが、此の一殿堂は、神權を中心にした教會の權威と、夫から出た文明の興敗を、眼前に示してくれる。佇徊時を経て堂を出づれば、噴水は依然として青空に白く、飛沫に日が映じては虹をなす。人影稀な坂路をたどれば、古城壁の下、並木に入日がさし、城外の静けさに、身は太古閑寂の中に入つた感がある。願れば聖ビエトロの大圓塔は、中世教會最後の光榮を示して、文明の危機を経過しつつある現代を瞰下して居る。而して此の教會が將來の文明に對して、如何の寄與をなすべきか、問へども、大塔は黙して答へず。

* * * * *
 ロマの西を長蛇の如く圍るジャンニコロの丘に上れば、夕日の光は、ロマ萬家

の夢を照らして、黄金色の世界を現はす。思へば、ラベロ河邊、七つの丘に立つた此都一つに、三千年の歴史を宿どし、其間に人生喜怒哀樂の活劇を演じた事幾何ぞ。政治軍旅の英傑、宗教や哲學の偉人、文藝や學術の天才が、或は次ぎ／＼に、或は一時に此の間に生息して、其の技量を示した事は、今更云ふまでもなく、幾多の大雄辯が此の間に人心を動かしたと共に、數知れぬ陰謀奸策も、此を天地として演ぜられた。法王廳の盛時に、宮殿車輿の華麗を競うた跡、北方蠻人の亂入に逢うて、奪掠破壊を受けた時の慘狀、さてはハンニバルが城門外壁を望み見たゞけで空しく引き返した恨み、四方征戰の軍旅が勇ましく凱旋して、直き目の下、今は町家の立て並ぶマルスの原で、勝利を誇つた莊麗、此等は皆過去の夢となつたが、「永遠の都」といふ一語には、今も尙ほ活きた響きが残る。

此の「永遠の都」に、地中海を池とした大帝國の榮華を集め、自ら神とし



ロマ、ジャニコロ丘上から聖ピエトロの眺め



イスパニア南アルメリア港、回教徒の城趾

て萬民を號令したロマの皇帝が、彼處に著しく見えるカピトリネの丘の上、珠玉の殿中から、帝都の四方を眺めた時の得意は、抑も如何であつたであらう。バラテネ丘の一角から起つた小民族が、武力で世界を征服して、三大陸の財寶と兵力とをこの一都に集めたのみならず、古今に秀でた法政の天才を發揮して、千百の民族を統御し、其の上にストア哲學の倫理觀を基として、貴族治者の思想を鍛鍊した歴史は、洵に千古の驚異、人界の壯觀であつた。夫に加へてロマの都は、又其の版圖内に存在したあらゆる宗教の集中處として、萬國の神々は其像をロマの神々と並べ、國々の民が各自の神を崇拜する外に、ロマ人自らも亦此等の神々に對し、それらの禮拜を捧げて、之に福利を祈り、禮拜、燒香、音樂、舞蹈、祭典の錯雜參差は、此の帝都の偉觀を加へ、ロマは人の世界の都であると共に、神々の都となつた。然し財寶の美、武備の整、權力の大、その上に禮拜神事の壯觀が具はつても、此の都にも帝國に

も、一つ大きな缺陷があつた。夫は即ち萬民を感化すべき唯一の信仰が存しない事にあつた。此の缺陷を補ふ爲に自然に生じ、又人爲で助長したのが、即ち皇帝崇拜である。

自然と人工と、権力と思想と、相助けて、皇帝を神 *Divus* とし、獨り人間萬民の支配者たるのみならず、又千萬の神々、祖靈、靈鬼、あらゆる靈界存在の首長として、皇帝を仰ぎ、その像前には焼香禮拜の徒が絶えなかつた。之がロマ帝國の公の宗教となつた。而して、必しも神靈とは云はずとも、政治上の偉才、思想上の哲人、ハドリリアノやアウレリオの如き皇帝は、或る點から云はゞ、之を神人として崇拜しても、甚しい不倫でない位であつた（今日から見ても）。されば此の如き神聖の帝位を踏むだ哲人が、同時に権力、武力、財力の元首として、此の帝都の繁榮を眺め、獨り自ら微笑を禁じ得なかつた得意と光榮とは、幾億の生靈中、他の何人も摸倣し得ぬ特權であつた。

然るに、此の如き帝政の最盛時、七丘の上に羅列した宮殿に天國の姿を現はし、世界の榮華と尊嚴とが、皇帝の一身に集中しつゝあつた時、帝國の隅で十字架の上に刑死した一人の力が、將來帝國を根柢から揺がさうとは、何人が想像し得たであらう。彼が刑死の後二十年三十年を経た間に、此の奇妙な信仰はロマの帝都にも入り來つたが、之を奉ずる者は、テベロの河向ひ、こゝジャニコロ丘の直下なる、貧民區域に住む賤民であつた。彼等は公の典禮に参加しないのは勿論、神像を祭らず、香を焼かず、神前の舞踏は尙更せず。而して陰に集まつては、泣くが如く歌ふが如くに、何か文句を合唱する。彼等の集會は、貧民窟の一角でも行ふが、又往々夜陰に墓場で集まつて居る。うそ氣味の悪い團體、怪むべき信仰、或は神々を無みした憎むべき行爲、此の如き感が、ロマ市民の彼等に對して抱いた感じであつた。

此に於て、六四年ロマ大火の後、放火だとの風評が立つと共に、市民の嫌

疑は彼等の上に加はり、天才の狂氣に似た皇帝ネロは、此の機會に此の奇怪な賤民を虐殺して、市民の鬱憤をはらした。之が所謂迫害の端を開き、其後四十年、賢君トラジヤノが法令を以て組織的に迫害を加へて以來、二百年に亘つて、帝王の威光を以て行つた十度の大迫害に加へて、地方的の小迫害は數を知らなかつた。而かも、此等の「無神者」には、帝國の威武に屈しない信仰の魂があり、殉教者の血の注ぐ處には、信仰の花新に開いて、終に帝國全體を感化し、今までは自ら神を以て任じて居た皇帝が、十字架に刑死の罪人を救主として崇拜するに至つた。帝國の権力武力財力も、終には此の賤民の魂一つを征服し得ず、却て千年來の大帝國を此の信仰に捧ぐるに至つた。

此三百年間の變遷は、實に眼前に見る此の七丘の都に起つた事歴、而して其の結果は、世界に延びて今日に至る。此等賤民の宗教は、此の「永遠の都」を中心本據とし、獨り精神上の勝者となつたのみならず、帝國崩壞の後を承

けて、権力武力に代はる信仰神權の中世文明を開くに至つた。ジャニコロの丘から見下す、東バラテネの丘上、シプレヌの木立に隠見する大宮殿の廢墟と、西の方天に沖する聖ビエトロの大塔とは、此の對照と變遷を眼前に物語る。而して、今、世界大戰を終つて、富強亡國のドイツが、降伏の條約に調印した此年の、秋の夕日は、二千年の昔に換らず、廢墟にも宮殿にも、丘の上の木立にも、テベロの流れにも、黄金色の光を浴びせかけて、今日の名残に清く照る。

ロマの三日は、また、く間に懷古の中に過ぎ、身は元の船上の客となり、海上に一夜を過ごせば、行く手にはシシリヤの山山高く聳えて、パレルモの市街が眼前に開展する、上陸して古寺古殿の中、金碧輝くモザイクには、十二世紀に於ける此島の文明を見た。船路三日アルメリアの港を出て、ジブラルター海峡を過ぎる。右には天然の海堡巍然として地中海の押へをなし、

左にはアフリカの山々雲を衝いて、その山角には回教徒の塔堡、歴々數へ得る。此處にも舊世界文明競争の跡を見る。

越えて四日、般はアゾルス群島の間を過ぎる。延長十數哩屏風の如くに聳えたサン・ジョルジ島の絶壁から、白銀の瀑水が幾條となく直に海に落ちて、末は白浪の中に没する。ピコの峯は雲に頭を没して居るが、火山の裾が延び延びて、海に盡くる處白波が立つ。新大陸發見以前の人は、此島々を世界の西端と心得、之から先は一步も西に進み得ず、コロンボも、こゝから先は必死の覺悟で踏み出したのである。然るに今我々は、行く手に新大陸の新文明を指し、船は悠々と島々の影を後にして西に進む。日は西の水平に没したが、こゝ數日の後に、我々が行き着くべき新大陸を照らして居るであらう。

* * * * *

かくて船路のはて十月十七日の夕には、ロング島の燈火を望み、その夕夜

更ける頃に、ハツソン河口に碇泊した。あたりは燈火の世界、海中からぬけ出て大空を衝く「自由の像」の指頭には、自由の光りが閃く。

こゝも亦社會動搖の數に漏れず、港人夫のストライキで、上陸の望はない。動かぬ船での一夜賑はしく、あくる日の一日も動かぬまゝ、河口碇泊で送つた。空には飛行機の爆音、水の上には汽船の往來繁く、其の水を限る岸の上には摩天樓が空をついて聳える。航海二週間、地中海の舊世界とは全く別天地をなす新世界の活氣は、空と陸と水とに充ち溢れる。

パリでは、十九世紀文明の總勘定を目撃した。地中海では、中世と古代との文明興亡を、ロマやバレルモで追懐した。而して今此處には新世界の新文明を眼前にして河口に碇泊する。彼處に並ぶ摩天樓には、一階一階、一室一室、皆各々鉅萬の富を左右する業務が行はれつつあるのである。新大陸の富源を開發し、舊大陸の富を吸收して、茲に古來比ひなき富の中心が現はれ、資

本制度産業の最大な集散地となつて居る。

五十年の昔、ラスキンはイギリスの状態を述べて云つた、「國中の森林は煤烟の爲に黒くなつて居るが、而かも民には暖を取るべき燃料を得ないものが澤山ある。海岸、至る所の港には、船の橋が林立して居る、而かも多數の民は饑に瀕しつゝある。』

此の言は直に之を此のニューヨークに移すべく、新大陸の文明は、一層宏大に此の對照、悲惨なる對照を示しつゝある。されば、建て並ぶ摩天樓で天下の富が左右せられる其の下には、人夫のストライキが行はれて、此の自分の船は、河口に泊まつて動かぬといふ現象も、敢て不思議ではなからう。バリの半年は形式輪廓の上で、十九世紀文明の總勘定をしたが、實質の上で二十世紀文明の運命方向を決すべき實勢力は、此の如き衝突の姿を此處に現はしつゝある。而して、十九世紀産業の方法を入れた國は、何れも皆同じ難關に遭

遇し、同様の危機に面しつゝあり、所謂る新世界の獨りアメリカのみではないのである。

然し、新世界の新活氣は他の方面をも有して居る。立て並ぶ摩天樓の中で最も新しく又高いウルウォース・ビルディングの姿を見る毎に、此の事を思はざるを得ない。此の建物が、高さに於て、大さに於て、又建築の美に於てニューヨークの巨魁であるのみならず、又實にそれを立て上げた資金に於て新氣運を表象して居る。ウルウォース氏兄弟は、元は無一文の小僧から立身して、一生にあれだけの富を堆積したが、其の富は實に「十錢店」の僅小な利金の集り、所謂る塵を積んで山を築き上げたのである。

彼は富を作る爲にのみ商賣をしなかつた。貧富の別なく、各人の懷中にある金錢に最大の價值を發揮せしめる事、富める少數者よりも寧ろ多數の民衆を顧客とする事、此の二點を主眼にして開いたのが、彼れの十錢均一である。

此の「十錢店」を開いて僅に二十餘年、彼れの志と、彼の天才と彼れの勤勉とは、十分の報酬を得、「十錢店」は、今や合衆國に洽く、而して民衆一般も亦その德澤を受けて、十錢乃至二十錢を投ずれば、他では一圓以上に値する品を容易に購ひ得る。ウルウオース氏は此の一事業、眞の民衆的商業に身心を集中し、他に何等の業をも投機をも營まず、而してニューヨーク最第一の摩天樓を一生事業の冠として築き上げた。社會的奉公と民衆の勢力との結合が具體的に現はれたのが、此のウルウオース・ビルディングである。此處には今までの如何なる帝王、如何なる貴族が作つたよりも、莊嚴雄大の大建築が聳えて居る。獨り莊大であるのみならず、其の資本は租税にあらず、又絞取りにあらず、民衆がその受ける德澤を感謝しつつ拂ふ一小銀貨の中の利潤のみで、純粹に出來上つて居る。而して、此の民衆的商賣に成功したのは、無一文の小僧から出發した一平民の力、彼が世界全體の工業に物品の供給を仰ぎ、合衆

國一億の民衆を相手として出來た結果である。而して其の根本は彼が一片の社會心と、満身の社會的技能とにある。資本制度の商工業は今や危機に瀕して居るが、其の商工業の世界的中心に、此の如き民衆文明の具體的表象が聳える。新世界の新活氣は、前途多望である。

此の思を抱いて漸く、ニューヨークに上陸したのは十八日の夕、車を驅つてホテルに向へば、街の兩側の摩天樓には、幾十階の窓々に皆燈火が輝いて居る。ホテルの室に入れば、電燈は晝の如く白く、湯槽に温湯は泉の如く湧く。かくてコモドー、ホテルの二十二階上に、船中の垢を洗ひ落とし、身は大西洋の西岸に着いたと思ひつゝ、眠に就いた。

大正九年十一月二日印刷
大正九年十一月五日發行

社會の動搖と精神的覺醒……奥付

正價 金貳圓貳拾錢

(製復許不)



著者

姉崎正治

發行者

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

株式會社 博文館

右代表社長

大橋進

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

青柳十一郎

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

株式會社 秀英舎第一工場

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

株式會社 博文館

東京帝國大學文學大科教授

文學博士

姊崎正治編

再補訂

文は人なり

正價金貳圓八拾錢

郵税金拾錢

全 三六判洋裝函入
一 冊 紙數五百八十頁

「文は人なり」は一代の文豪として今尙幾多の憧憬者と崇拜者とを有する高山樗牛氏の遺稿の中から、所謂其の粹なるもの、尤なるものを蒐めたもので、舊版は既に五十版から出してゐる。

今度これを増訂するについては著者の親友であつた姊崎嘲風氏が内容に取捨を施して調子を大分緊張させた上に、舊版に洩れた日蓮關係の文章や樗牛嘲風の往復した書翰を新たに増加してある。

世界文明の新紀元

全 四六判洋裝函入
一 冊 紙數五百有餘頁

正價金貳圓貳拾錢

郵税金八錢

東京帝國大學文學大科教授

文學博士

姊崎正治著

地大いに震ひて新らしき泉湧き、十九世紀の競争文明は破産して、二十世紀は將に協同文明の新紀元を開かんとす、二十年前ドイツ文明の破綻を論破したる著者は茲に大戰の終結に際して、過去を評論し、現代を警策して、將來の世界的新展望を世に示さんとす。

新時代の宗教

全 四六判洋装 上製函入
一 正價 金 貳 圓
冊 送料 八 錢

『大戦の爆發で世界は大震蕩し、人心は根柢からゆるぎ出した、地大いに動いて、新な泉の湧くべき時、大破壊に續いて大建設の起るべき氣運は、肅々として近きつゝある、人性の本然を回復し、之を文明爛熟の火坑から救ひ出し、而して人間らしい生活の新世界に人生の醇化を貫徹するは、人類今後の任務』此の任務に當るべき宗教如何。是れ本書が世の覺醒を要求する問題也。

宗教と教育

全 四六判總布上製美本
冊 一 正價 金 壹 圓 六 拾 錢
送料 八 錢

東京帝國大學文學部教授

文 學 博 士
姊 崎 正 治 著

佛 教 界 の 靈 光

文 學 博 士
姊 崎 正 治 著

法華經の行者日蓮

全 菊判洋装 函入美本
冊 一 正價 金 參 圓 八 拾 錢
送料 拾 八 錢

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、記傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の籌策と感應の法樂と、奮戦の叫びと信仰の凱歌と、參差照應の壯觀、古今に冠絶す。忠實の上人の遺文に基き、佛教史、宗教學、宗教心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ廿世紀の新法華經也。著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に、之日本の公衆に薦む。

『法華經の行者日蓮』の「廣本」は批評研究的、今度の「要本」は解說的に要を摘むで、佛教の術語を一々近代語に直し、又脚註で解説したももの。「廣本」以後の新研究や、以外材料を加へて、而かも容易に通讀し得る様、「廣本」の四分一で『法華經行者』の經歷思想、信仰、努力、血と涙との跡を傳へたのが、この一篇。

法華經の行者日蓮

全 三六判總布 函入美本
冊 一 正價 金 壹 圓 四 拾 錢
送料 六 錢

意志と現識としての世界

全部三冊
菊判總クローヌ

著ルエウハンペツヨシ

士博學文

譯治正崎姉

シヨ氏の哲學は近世思想とギリシヤ思想との融合、東洋思想と西洋哲學との連鎖。徹透の思想と剔抉の論議とを以つて、高遠の理想を宣べ、寂靜の福音を傳ふ。その大著作は彼れが死後滿九十年の記念として發刊せられたり。今やこの大哲の名文は茲に姉崎博士の流暢なる口語に依りて譯出せられ、特に原著の論調語氣を寫すに勉められたれば從來哲學書は難解なりとの誤解もこの一書に依りて一掃されん。出版者たる本館も、亦この廉價を以て不朽の傑作大譯書を世に提供すを以て敢て誇とせん。

| | | |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| 上卷 | 中卷 | 下卷 |
| ■紙數七百五十餘頁 價正 參圓四拾錢 小包料十二錢 | ■紙數六百四十六頁 價正 參圓四拾錢 小包料十二錢 | ■紙數七百五十餘頁 價正 參圓四拾錢 小包料十二錢 |

根本佛教

全菊判總布洋裝
一冊 紙數四百七拾頁

授教學大科文學大國帝京東

士博學文

著治正崎姉

正價金貳圓四拾錢

郵税金拾八錢

八宗九宗多岐の佛教とその根本を尋ねれば、佛陀釋尊の大悟に發しその人格に基く、嚴密なる歴史研究に依りて、この根本佛教を闡明し、且つ其枝葉花實の依つて出づる所以を指示したるもの、即ち本書也。佛陀の一生如來の人格、世相、觀察分析、涅槃の理想、般若の空觀、法華實相觀、往生の宗教、道行の標準僧伽の團結、布教、端緒等この一冊に盡せり。

1-214-46

刷縮補增

集全牛標

標牛歿して既に十餘年、世界に於ける帝國の權輿も文明に對する國民の思想も、また一般社界の風潮も殆んど全く一變して隔世の感あるが如くなるにも拘らず、其の論議は救世の光を以て讚仰され、其の文藻は典雅を以て愛誦され學に志し文藝に意ある青年の指針と同伴侶として同情ある警世の聲をして讀まざるを恥づる所以のものは何ぞや至誠眞摯を以て達觀せる意志感情を天稟の才筆に託し奮勃たる英氣を遺憾なく表現したるに依る。茲に増補刷全集成りて「吾人は現代を超越せざるべからず」と努力し「文は人なり」と云ひし標牛が人格のいよいよ焔々として常に日月の如く時世の上に輝くを見る。現代批判の標準として敢て江湖の一讀を望む。

嘲風・芥舟
臨風・愚佛
共編

文學博士
高山林次郎遺稿

| | |
|---|----------|
| 全 | 1・美學及美術史 |
| 部 | 2・文學評論 |
| 六 | 3・史論及史傳 |
| 冊 | 4・時論及思索 |
| 完 | 5・想華及小品 |
| 成 | 6・日記及消息 |

三六判洋製特製函入
正價 貳圓八拾錢
各册

送料各拾錢

終